

匠林

SAKABAYASHI

隨筆特集



# 至高の陶醉



金刀比羅宮蔵 寛政6年(1794年)円山応挙 晩年の作(部分)

220余年の伝統の技が贅をつくした「煌」きらめき。

讃岐の金毘羅酒として親しまれきた金陵が、酒づくりの贅をつつておくりした「清酒煌」金陵の歴史は今をさかのぼる(三〇)余年の寛政元年。当主八代目であった西野嘉右衛門が金毘羅さんの齋ではじめた酒づくりがその第一歩。以来、金刀比羅宮のご神酒として栄誉をうけ、その丹精こめた手づくりの味わいは、金毘羅詣の人々から高く親しまれてきました。酒酒「煌」のえも言われぬ風味と「煌」には、金陵の心意気と酒づくりの神髄が細やかに思っています。

真珠玉のびとく搗きあげ

水品のびとく研ぎすました酒造好適米(山田錦)

清酒煌に使っているのは、酒造好適米の中から選びぬかれた最高の大粒米。これを丹念に精度精白し酒の雑味等の原因となる外層部を削り、磨き、吸水のよい、粟粒よりやや大きい、玄米のむすみから割はりの、まるで真珠玉のようなぶだけの酒米とする。これを、良質の寒の水でくり返くり返し研ぎすまし、本格的な酒づくりの仕込みへと移っていく。昔から「麴、二甃三造り」といわれるとおり複雑多岐にわたる工程を熟達杜氏がつとめてきた。

つごなしていく。杜氏は寒中夜も眠らず、我が子を育てるまに精魂をこめ、技の限りを尽くして低温でじっくりつくりあげる。こうして、清酒のアルコール分、旨味を米びから造り出した、手づくりの微妙精緻な煌を誕生させたのです。芳醇なこく、口あたりの爽やかさ、喉ごしのよさ、まさに清酒の芸術品のご希なる清酒煌を、日本酒をこたく愛するみなさまにじっくりと味わいつくしていただきたい。

**煌**  
金陵

超特撰

税込 標準価格 10,800円 1.8L  
5,400円 720ml

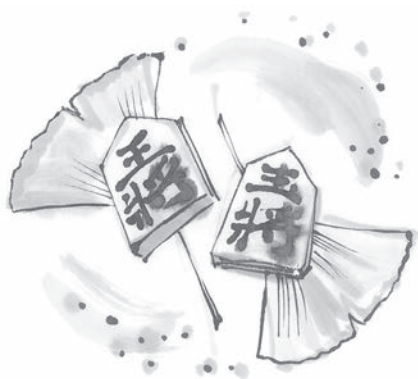
ラベル右下に記しております番号は、一本一本責任をもって製造いたしました品質の証し。ご入手いただいた貴方さまだけの番号です。

西野金陵株式会社 香川県仲多度郡琴平町六三三 電話(〇八七七)三三三三  
未発泡の清酒は常温で保ち、冷蔵庫や授乳期の飲酒は控えてください。

# 匠林

SAKABAYASHI

隨筆特集



# 酒林

SAKABAYASHI

随筆特集

将棋ブームに火が付いた 池井 優 …… 4

生類厄介なり 高橋 和 島 …… 6

ほろ酔い詩歌紀行 — 酒造りの唄 日高 昭 二 …… 8

白寿と糖尿病 杉本 忠 夫 …… 10

『邪宗門』のリズムに 安 森 敏 隆 …… 12

戦後の風 内 野 潤 子 …… 14

故郷の人 志 村 有 弘 …… 16

手巻き、という種類の時間 片 岡 義 男 …… 18

文化の違い・国土の違い 宮 地 智 子 …… 20

絵と文 向日 葵 中 西 美 子 …… 22



絵と文 ㊦

型絵染とヨーロッパの関わり

さかもと ふさ …… 23

人間的に解釈せざるを得ない

志村 栄至 …… 24

絵と文 ㊦

さらば愛しき人よ

佐川 毅彦 …… 26

「お蚕さま」と「富岡製糸場」

永岡 慶之助 …… 28

宅配牛乳

山本 千明 …… 30

オアフ島のマリークノール小学校を訪ねる

宮本 富夫 …… 32

密造酒の取締り

山西 無聞 …… 34

矢切の渡し（中）

関八州夢幻譚

池田 一貴 …… 37

表紙・グラビア …… 七宝（しっぽう）

# 将棋ブームに火が付いた

池井 優  
(慶應義塾大学名誉教授)



## 十四歳藤井聡太四段の登場

将棋ブームが起こった。火付け役は藤井聡太四段だ。史上最年少十四歳二か月でプロ棋士なつて以来連戦連勝、その快進撃がテレビ、新聞、雑誌などマスメディアを通じて連日伝えられいまや日本において一番注目される中学生となった。

将棋のプロへの道はきびしい。全国から、将棋の天才が、プロの養成機関奨励会に入会してくる。関東、関西合わせて数百人いる奨励会員のなかから四段となつてプロデビューできるのは年に原則四人という狭き門である。十年は普通、なかには十五年以上もかかつて突破する奨励会、勝敗に加え、二十六歳までという年齢制限もあり、

努力もむなしく「お世話になりました」とプロへの道をあきらめて去っていく世界である。

この奨励会をあつさり突破し、中学生でプロになったのは藤井を含め、これまで五人しかない。加藤一二三―十四歳七か月、谷川浩司―十四歳八か月、羽生善治―十五歳二か月、渡辺明―十五歳十一か月だ。加藤は藤井に更新されるまで最年少でのプロデビューの記録を持ち、十八歳でA級八段となり「神武以来の天才」と呼ばれ、後に名人、王位、棋王、王将のタイトルを獲得する大棋士となった。谷川は名人五期により引退後には十七世名人を名乗ることができる実力者、日本将棋連盟会長を務めるなど将棋界の牽引車と

なった。羽生はいうまでもなく一時七大タイトルを独占、七冠王を達成したスーパースター。渡辺は名人位についたことはないが、最高峰のタイトルである竜王戦にめっぽう強く、五段当時予選から勝ち上がつて竜王のタイトルを獲得する離れ業を見せ、世間をあつといわせた。

中学生でプロになった先輩四人は、それぞれ将棋界の頂点にたつた。将棋の世界では長年芽が出ず突然開花する例が稀に見られるが、将棋の感覚はそうでないらしい。

## 藤井の快進撃

デビュー直後の初戦から藤井は注目された。なんと公式戦最初の対戦相手は加藤一二三九段。六十二年振りに最年少プロの記録を塗り替えた大先輩であった。十四歳の藤井、七十七歳の加藤、年齢の差六十三歳、しかも藤井はこの大先輩を破つて第一戦を飾つただった。

以後、藤井は勝ち続ける。ブルーのリユックサクックを背にあげない表情で対局場の将棋会館にやってくる。将棋盤に向かい第一手を指す指先、対局中の昼食になにを食べたかの「勝負メシ」、師匠の杉本昌隆七段へのインタビューなどさまざまな取り上げ方がなされるなか、淡々と盤に向かい勝利する藤井に将棋ファンのみならず、普段将棋にあまり興味のないひとびとも「連勝はどこまで伸ばせるのか」など関心を寄せるようになった。

藤井の異能を活用しようと考えたのは、インターネット配信の「アベマトV」であった。大ベテラン羽生三冠から中堅、若手の実力者七人と対戦する「藤井聡太四段炎の七番勝負」を企画した。結果は大成功だった。六勝一敗、しかも六勝のうちには羽生、佐藤康光九段、深浦康市九段などA級のトップクラスが含まれていた。

こうなると、勝利は運によるものではなく、実力に裏付けられたものであることが明らかになった。第六局で敗

れた精密な読みで知られる佐藤九段はいう。

「序盤、中盤はおおらかな指し手で、強さは感じませんでした。ところが、終盤を迎えると、突然ギアをチェンジしたような感じ、いきなり五〇〇キロくらいスピードが出てしまうようなイメージです。」そしてあつという間に詰まされてしまったという。

#### 藤井効果

中学生棋士藤井聡太四段の登場と快進撃は思わぬ効果を生んだ。

藤井人気に日本将棋連盟は、藤井の書いた文字「大志」をアレンジした扇子を作成、関東と関西の将棋会館の売店に並べたところ、即日完売、関西だけでなく約百本を売り上げたという。通常、扇子は名人、竜王などタイトル保持者の一流棋士が作るもので、新人では異例中の異例である。対局姿を入れたクリアファイルもあつという間に売りが切れた。今後さまざまな「藤井グッズ」が出てくるであろう。

藤井がはじめて将棋を指した五歳の時使ったという各駒の動きを矢印で示した初心者向けの将棋盤が売れ、関西将棋会館開催の子ども教室の新規入会者は一月から四月だけでも昨年同期の約一・七倍になり、スマートフォンなどのゲームアプリ「将棋ウォーズ」を配信する「HEROZ（ヒーローズ）」の新規会員登録者は三十万人増加した。

将棋の世界も大きく変わりつつある。序盤から王を囲わずいきなり攻めかかるかつてなど「こんな将棋を指すなら荷物をもとめて出ていけ」と師匠から破門されるような新戦法が次々考えられ、それがあつという間にインターネットによって広まり、対策が講じられる。

逆に、アマチュアでも棋力に応じてインターネットによる対局も可能になった。

藤井四段の活躍で子ども、若者、女性が将棋に関心を持つようになった。将棋の普及、底辺の拡大につながる「藤井効果」の意味は大きい。

# 生類厄介なり

高橋和島

(作家・郷土史家)



るニホンカモシカの愛知県内推定生息数は最近十年間に一・七倍に増え、千九百頭近くになっているらしく、名古屋近郊の複数都市で続々と目撃されている。

実は名古屋通勤圏都市の一つである私の街でも複数の知人がニホンカモシカを目撃している。

農作物や山の木々を食い荒らされるという被害はあるものの、出くわしたとき襲われる心配のないこのニホンカモシカはまだいいが、都心部での目撃情報がもう珍しくなくなってしまうイノシシは怖い。

私が散歩コースとしている近くの林道はイノシシが歩き回っている痕跡だらけ。明日にでも遭遇する怖れがある。けれども足腰のおぼつかない老骨。相手が形相を変えて突進してくるようなことがあったら、うまくやり過ぎす自信は全くない。

林道ならまだしも、拙宅のある住宅地の公園にもイノシシは出没する。姿を見たわけではないが、連中は地中の

五月半ば、名古屋北部に隣接する尾張旭市の住宅街にニホンカモシカが現れ、警察、消防が出動する騒ぎとなった。

建物とフェンスの間に追い込まれた体長約一メートル、推定二歳のカモシカは麻酔用吹き矢二発をくらって眠らされ、豊橋市動物園へ引き取られた。

尾張旭市は史上最年少の将棋プロ・

中学生の天才棋士藤井聡太四段が住む瀬戸市の隣で名古屋都心部まで車で三〇分くらい。つまりニホンカモシカの出現は街中での出来事だったわけ。

それだけに地元の中日新聞は社会面トップ記事として大々的に取り上げた。特別天然記念物として保護されてい



ミミズなどの虫を食べるため、芝生を  
広範囲にわたって掘り返しているから  
分かる。

歓迎できぬ生きものが街中を横行す  
る現代、一目置かれ、特別敬意を払わ  
れる存在となるのは連中の始末をする  
腕を持ち合わせた人である。

元市会議員のNさんはイノシシ獲り  
の名人で通っており、最近で言えば昨  
年十一月から今年二月までの解禁期に  
三頭の大物を罾で仕留めた。むろん猟  
は趣味で、ポランティア。仕留めたイ  
ノシシの肉は市内の老人会などへ持ち  
込み、無料でふるまっている。

女性でも厄介な生きものを始末する  
勇ましい腕の持ち主がいる。地元で有  
名な陶芸賞を取った売り出し中の女流  
陶芸家Sさんは最近、マムシの被害に  
遭ったが、実に冷静に始末したことで  
一目置かれる存在となった。すなわ  
ち、自宅近くのゴミ袋集積場前で足首  
を噛まれたとき、慌てず騒がず、棒切  
れで敵を叩き殺した。彼女によると、  
被害に遭った場所にゴミ袋目当ての鼠

がくること、そしてこれを狙う蛇も  
やってくることを承知していたのと、  
病院で血清を打ってもらうには噛まれ  
た毒蛇の種類（本州ならマムシかヤマ  
カカシ）を明かにする必要がある、そ  
れには襲った蛇の現物を医師に見せる  
のが手っ取り早いと聞いていたことな  
どから、こうした対応ができたのだそ  
うだ。

毒蛇に噛まれたら、男でも冷静な行  
動は期待できない。動転し狼狽して噛  
まれた箇所の手当をするだけで精一杯  
だろう。ある程度予想していたにせ  
よ、大した女性である。Sさんの陶芸  
作品のよしあしは正直なところ分か  
らないが、男顔負けの度胸の持ち主が造  
るのだから悪かるうはずはないと思っ  
ている。

街中での歓迎できない生き物の出  
現、棲息は近年のわが街および近隣市  
町村に限っても、ハクビシン、アライ  
グマ、カミツキガメ、スズメバチと賑  
やかな顔触れである。

TVニュースで知ったときは哑然と

したのだが、前述のニホンカモシカ  
騒ぎの直後に、名古屋城外堀で、体長  
一・四メートルの北米原産大型肉食魚  
のアリゲーターまでもが捕獲されてい  
る。

在来種からこうしたとんでもない外  
来種まで、人間の縄張りへの様々な生  
き物の進出は今後、増えはしても減る  
ことはないだろう。

前述のニホンカモシカ騒動では警察  
と消防が出動しているけれど、こうし  
た生き物騒動の管轄は決まっているの  
だろうか。不勉強な当方が知らないだ  
けで法令の類があるのかもしれない。  
転入を希望する「住人」の問題だか  
ら、市町村の住民課に違いないとす  
ると、話としてはおもしろい。しかし、  
むろんそんなわけではない。

管轄先がどこであるにしても、市町  
村役場や警察署、消防署などに生き物  
の専門知識や捕獲の腕を持ち合わせ  
た、Nさんのような頼りになる人材を  
配置してもらいたいものだが、難しい  
注文ということになるだろう。

# ほろ酔い詩歌紀行 — 酒造りの唄



日高昭二

(神奈川大学名誉教授)

かつて造り酒屋では、酒を仕込む時にいろいろな唄がうたわれたという。そうした仕事唄を総称して「酒屋唄」と言ったという。そしてそれは、仕事の種類に応じてさまざまにあった。

たとえば、酒造りに用いる水を汲む時の「水釣り唄」、仕込桶を洗う時の「流し唄」または「桶洗い唄」、米をとぐ時の「米とぎ唄」、麴をつくる時の「床もみ唄」、醗をつくる時の「醗摺り唄」、醗を仕込む時の「仕込み唄」、発酵した酒を櫂で搗く時の「櫂搗き唄」または「櫂入れ唄」、そして最後には「留め唄」などがあったとされる。

それらは、総じて、酒造りを寿ぐために歌われたことが多いというが、しかしそのなかには、酒造りの仕事のつらさが嘆かれてもいたという。

次にあげるのは、福島県民謡連盟が編集した『福島県民謡全集』（高島書房出版部、一九八〇年）に集められている酒造りの唄である。

イヤーイハ 今朝のヨ 寒さに  
流し番は どなた  
かわいいあの娘の コラ声がする  
可愛いあの娘の 洗い番の時は  
水も湯となれ 風ふくな

「会津酒屋流し唄」の冒頭だが、竹を細く割った「ささら」という道具で桶を洗った時の唄である。ほどよい「ささら」の音が出るまでには最低五年はかかることされ、その頃にはまた「流し唄」も上手になっていたとい

う。次に「米とぎ唄」。

酒屋ナ ヤエ 米とぎのヨ  
始まる時はヨ  
へらもナ ヤエ しゃくしもヨ  
チヨイト手につかぬヨ  
とげやとげとげ とぎやげて煙草  
煙草吸わせましょ 長煙草  
酒屋若い衆に ほれるな娘  
花の三月に 泣き別れ

一斗ほどの米を桶に入れ、水をかけながら三、四人で足をふみつける。酒造りは冬の期間だけに、その冷たさは格別なものがあったと言われるが、会津では、杜氏の大半が越後から来てい

たので、三月には故郷へ帰ったということだ。

次は「会津醗摺り唄」。桶に原料米を仕込み、発酵したものを權棒という道具ですりつぶす作業である。

とろりとろりとヨイ  
今摺る醗は

酒に造りてヨイ 江戸に出すよ

サノヨイヨイ ヨイヤラサノ

ササ コレワイシヨノ ショウ

宵にもとする 夜中にふかす

朝の早うから 酒つくる

どんとどんと 今つくかいは

お蔵繁盛と つくわいな

こうして唄って、その数で時間をみたというから、唄は作業と一体でもあったわけである。次は「仕込み唄」。

ヤレドンドナ ヤエドンドト

今搗くかいは

ヤレ酒にナヤエ造りてヨ

ヤレサナ 江戸へ出す

ヤレサエ 江戸へ出す

酒の仕込みは、最低六石造りで、原料米を大きな釜で、コシキというむしろに入れてむす。むしろおえた米は、一斗ずつ取り分け、造り蔵の中にむしろを敷いてひろげてさます。仕込み温度にさますと、麴と醗と水を仕込み方法の違いによって、きめられた量を混ぜて仕込む。この作業は朝の五時頃で、唄につれて進められたという。

最後は「權つき唄」である。

ヤレからめナヤエ からめたヤ

からんでつけば

ヤレエのむなヤエ 香もでる

ヤーヤレサナ 会津川

山が見えます 越後の山が

もはや妻子も 近くなる

朝早く仕込んだ原料米が、夜七時

頃に発酵して盛り上がる。桶のふちに四、五人がのり、權でかきまぜる。

こうして二十日位たてば桶の酒が出来上がる。できた醪は二升位を袋に入れて、舟かけという絞り器で清酒にする。權つきは最後の仕上げなので、出来た喜びと故郷に帰れる嬉しさが交錯している。

ちなみに、引用したのは、東北会津の民謡だが、では南の方の唄はどうなっているのか。福岡博『佐賀の民謡』（佐賀新聞社、一九八七年）によれば、基本的には変わっていない。酒造りは、「一コウジ」「二モト」「三モロミ」と言われるように、麴と醗（酒母）の出来具合で味が左右される。だから、それらの作業が、唄にうたわれていることも会津地方と同じである。佐賀の杜氏は京都の篠山から来ていたというから、当然、帰る故郷の地名は変わる。

丹波帰りに雪降り積り

家じゃ妻子が泣いている

# 白寿と糖尿病

毎年九月に、兵庫県で初めて敬老の日が設けられ、お年寄りに敬意を払い、その長寿を祝い、日本人がますます健康に長寿できるようにと日本各地で催しが行なわれるようになりました。

日本人の敬老の精神はこのように脈々と流れております。日本人の平均寿命は超高齢になり世界一〜二位の長寿国の名誉を得てきました。

この進歩（成果）は日本が物心両面で発展し、豊かになったことによる成果と考えられます。



そして、それに伴い各自治体の衛生面での意識改革、住民への啓蒙活動等の地道な努力も加わるようになりました。

今では不自由のない上下水道の整備が日本全国津々浦々に行き渡り、国民の衛生管理面では、ほぼ完全に近い状態になってきたことにあると思われます。また、側面から、国の大きな財政支援も忘れることができません。

これらの公共事業は腸チフス・赤痢・疫痢などによる法定伝染病をほとんど

駆逐してしまいました。

また肺結核も、学校・職場・住民検診等により早期に診断（発見）されるようになりました。発見された場合には、医師による適切な抗結核薬の投与がなされ死に至る病ではなくなりつつあります。

ところが、近年は、悪性腫瘍（癌）、心筋梗塞（狭心症）、脳梗塞が日本人の三大死因とよく知られております。住民検診等での早期発見、健康管理指導が自治体で実施され成果を上げて

杉本 忠夫  
（虎の門病院 内分泌代謝科）  
非常勤嘱託医

おります。

最近、糖尿病の増加傾向が、ことある毎に報道されております。都合の悪いことに糖尿病を持つ方では、これら三大死因の発症頻度が糖尿病のない方より高いと言われております。

悪性腫瘍でみえますと、糖尿病をおもちの方は悪性腫瘍の発症頻度は一般の方々よりも約一・五〜一・七倍も多いといわれております。

また、脳梗塞の発作もおこしやすいこともわかっております。

そのうえ、糖尿病をお持ちの方は狭心症、心筋梗塞に罹りやすく、また病気の進行度も比較的若い年齢から発症しやすいといわれております。

ところが、最近では糖尿病をお持ちの方も悦ばしいことに白寿（一〇〇歳）時代に突入してきました。

白寿になられても元氣に通院されておられます。しかし、家族のどなたかが、道中を心配され付き添って来院される方が多いようです。

糖尿病をお持ちの方で白寿を記念し

てお祝いをされる方が増えてきました。

白寿の方のお祝いを記念して記念品を選ばれますが、その品物は虫眼鏡（天眼鏡）を選ばれておられる方が多いようです。やはり、年齢による視力の低下を気にされておられるのでしゅうか。

ところで白寿の糖尿病の方は雨の日も、風の日も、負けずに病院へ何十年間も通院されたことになりました。

その永い期間、食事療法、運動療法に精進され、古老の言葉どおり、早寝早起き、腹八分目の規則正しい生活週間の方々が多いように見受けられます。

また、通院されている期間に、血圧測定により早期に高血圧が診断され降圧剤が処方され血圧のコントロールが始まります。

糖尿病の運動療法の可否を決めるための定期的な心電図検査では狭心症や不整脈が早期発見され適切な冠状動脈の血行再建術などが行なわれます。

その他、胸部X線写真の定期検査で自覚症状がない場合でも異状陰影の診

断がなされます。

また、定期的な血液検査等でコレステロール・中性脂肪値や肝機能異常などが軽症時から診断されることもありま

す。血糖値のコントロールの乱れからその原因を精査し、結果として癌などが発見され早期の治療に結びつくこともあります。

しかしながら、糖尿病の治療を放置すると、糖尿病性網膜症で視力障害をきたすこともあります。

また、糖尿病性腎症で慢性腎不全に陥り人工透析療法が必要になることはよく知られております。

糖尿病性合併症は糖尿病を適切に治療することで予防できます。

これらのことが、複合的に重なり糖尿病の方の白寿への挑戦が始まってきているものと考えられます。

これからも、糖尿病の方は白寿をめざして、食事療法、運動療法、定期的な外来通院を実行していきましょう。

# 『邪宗門』のリズムに

安 森 敏 隆

(同志社女子大学名誉教授  
歌人)



『邪宗門』は明治四十二年三月に発行され、明治三十九年四月より四十一年十二月までの作品百十九篇が「魔睡」「朱の伴奏」「外光と印象」「天草雅歌」「青き花」「古酒」の六つの章に分けられおさめられている。続く詩集『思ひ出』の「断章」などは、『邪宗門』の時期と重なり、「創作の順位からいえば或いは『思ひ出』の方が先に

だすべきであったかもしれない」(藪田義雄『評伝 北原白秋』)という意見もあり、この両詩集は踵を接している。

本集に収めたる、六章約百二十篇の詩は明治三十九年の四月より同四十一年の臘月に至る、即最近三年間の所作にして、集中の大半

は殆昨一年の努力に成る。就中『古酒』中の「よひやみ」「柑子」「晩秋」の類最も舊くして『魔睡』中に載せたる「室内庭園」「曇日」の二篇はその最も新しきものなり。(例言)

と言っているが、北原白秋にはその前に「文庫」投稿時代の詩人・白秋と歌

人・白秋がいた。選者であった河合醉名は、『文庫』に於ける白秋最初の進出は目覚ましかつた。大抵の投書家は歳月を経るに従つて本領を發揮するものだが、白秋だけはさうではなく、初めから天才現はるの感じがした。だから彼の作は一篇も没書にはなつてゐない。明治三十六年十二月号『文庫』所載の『恋の絵ぶみ』がはじめてである〔『文庫詩抄』の「解説」・昭和二十五年六月）と言つてゐる。この「文庫」時代において書かれた詩は、「七五調」を中心において書かれてゐる。それが、『邪宗門』にきて「予が、象徴詩は情緒の諧謔と感覚の印象とを主とす。故に、凡て予が據る所は僅かなれども生れて享け得たる自己の感覚と、刺激苦き神経の悦楽とにして、かの初めより情感の妙な震慄を無みし只冷かなる思想の概念を求めて強ひて詩を作爲するが如きを嫌忌す。されば予が詩を讀まむとする人にして、之に理知の闡明を尋ね、幻想なき思想の骨格を求めむとするは謬れり。要するに予が最近

の傾向はかの内部生活の幽かなる振動のリズムを感じその儘の調律に奏いでんとする音楽的象徴を専とするが故に、そが表白の方法に於ても概ねかの新しき自由詩の形式を用ゐたり」（例言）と白秋自身言うように「新しき自由詩の形式」であると自負する五音と七音を中心に組み合わせた自由な定型へと移行していく。集中「最も舊くして」という「よひやみ」は初期の七五調から「五七調」へと変わる。

よひやみ

うらわかきうたびとのきみ

よひやみのうれひきみにも

ほの沁むや、青みやつれて

木のもとに、みればをみなも。

な怨みそ。われはもくせい、

ほのかなる花のさだめに、

目見しらみ、うすらなやめば

あまき香もつゆにしめりぬ。

さあれ、きみ、こひのうれひは

よひのくち、それもひととき、

かなしみてあらばありなむ、

われもまた。——月はのぼれり。

そして、『邪宗門』の「最も新しき」という「室内庭園」あたりの作品にくると、

室内庭園

晩春の室の内、

暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の

水はしたたる……

そのもとにあまりりす赤くほのめ

き、

やはらかにちらばへるへりオトロ

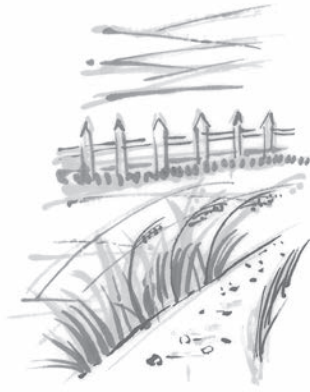
オブ。

わかき日のなまめきのそのほめき

静ころなし。（六聯中の一聯）

という具合に、そのリズムは、五五五八四五四七……という具合に、五音を中心に自在な韻律でうたわれようになり、五五調、五七調、七語調の律の他、五音を中心にした五六、五七、五八、五四といった自在な律が駆使される、ことになる。

# 戦後の風



## 内野潤子

(歌人・エッセイスト)

赤羽の被服廠に動員されて、毎日軍服を縫う仕事にはげんでいたのだった。ある時急に空襲警報のサイレンが鳴り、敵内の防空壕に逃げたことがあった。低いB29の音が迫ってくる中で、私は人生論ノートを開いて読んでいたのだ。わずかな自由時間を捉えて。死の恐怖から逃れて。

八月十五日が来て、やっと体が軽くなった。九月一日、入学していた女専から入学式の知らせがあり、焼けた、れた渋谷の町を付き添いの叔母と学校まで歩いた。暑い日であった。

これからは自分の好きなことを学ぶよろこびで、空腹も忘れて広場に集った。

二年目に短歌の授業があり、アララギの歌人藤森朋夫先生が教えて下さった。毎時間提出の一首の中に、この歌があった。先生がよくできた歌を選んで評を下さる。

これはよい歌だと褒めて下さって、嬉しかった。戦後の傷口はまだ固まらぬ心が出ている頃の心が生んだ一首で

昭和萬葉集が講談社から発行されたのは、昭和五十年の頃と思う。一般の人にも応募できるというので、私も友人にすすめられ第一歌集の『西日』から十首選んで送った。その十首の中の一首が第七巻の昭和二十年―二十二年の歌の中に採用されたのだった。

動員の頃を思へば心たぎつ

壕内に読みし人生論ノート

そしてこの一首の添え書きは次のような一文であった。

〔『人生論ノート』は三木清の著書、昭和十六年創元社発行。戦争体制のき

びしくなった時期に、生きる指針を得ようとする学生に広く読まれた。天野貞裕の『学生に与ふる書』岩波新書とならんで学生の必読書的存在であった。私は兄の本棚から抜いて柱によりかかりながら読んだ時、十五歳の体に何か突然光がさしたように感じたのだった。それ以来体に放さず肩から下げた非常用の布袋の中に、いつも入れていたのである。胸には動員生用の布をつけ名前と血液型入りのその札と袋には数珠じゆずを入れた。どこで死んでもおかしくない毎日であった。



ある。

学生生活も焼け跡の校舎で窓ガラスのない教室で雨が降ると机をもつてずるずる奥に移るのだった。食べるものがない。お昼はさつま芋の人はまだいい、一食抜く人もいた。私はララ物資の脱脂大豆をほぐしてフライパンでいつて塩をまぶしたのを食べた。何の意味もなかったのに、楽しくて明るい毎日だった。

少しずつ校舎もとのい、食べ物も少しずつ増えて、学生の三年間は九十歳の今思っても輝かしい青春と思う。卒業してから、新宿の女学校の教員になった。二十歳の先生である。教室の隅にベテランの女の先生の隣りの席に坐り、これも又毎日が楽しくてならなかった。

その後、動員で知り合った夫と結婚して、家を離れたのだ。大家族の中で好きなことだけしてきた私にとって、結婚はあまりにも夢と遠い暮らしてあった。

先頃亡くなられた大岡信氏の朝日新

聞の「折々の歌」に、私の次の歌が採られたのは、私が七十代になった頃のことである。

岩波新書の六九九『折々のうた』に次の歌が載っている。

「少女の日の空想によほど遠くして

夫の傍に雲を眺むる。  
大岡氏の評は次のように記されている。

『西日』（昭三十二年）所収。戦後まだ日も浅いころの若い女性の心のたたくまいが、この歌に陰影を生んでいゝる。これと並ぶ次の歌を読むと、今さらのように半世紀近い時が経つたのだと思わせられる。

幸福かと夫に問はれて額うなじき

額うなじく吾が悲しくなりぬ  
背後には屈折した心情があった上で  
の額きだろうが、今の女性ならもつと  
割り切つて答えるだろう。時代は変わった。作者の世代も今では七十代初め。」

まことに適格な指摘である。当時の私は一軒の小さな家に、姑と夫と三人の

新婚であった。

姑は私の祖母と同年代の優しい人だったが丁度私の結婚の前の年に夫が亡くなったばかりで淋しかったと思う。姑と二人暮らしの中に私が嫁いで家事もできない者が妻になれるわけはなく、家に帰りたいと泣いてばかりいたのだ。その後主人の兄が復員して、子供のできた私は実家の借家に移つたのだった。その頃出あつた庄野潤三の本の前がきは、まるで私のようにだど驚いた。「戦争中に女学生で日の丸の鉢巻をして工場へ通つたような人が戦後みなそれぞれ結婚し子供が生れて、普通の奥さんとして暮らしている。そういう人はいつたいどういふ気持ちで日常生活を送っているのだろうか。素晴らしいといえることは少しも起らなくて、これでは詰らないと思つていゝるか。いやこれが当り前で無事なのが何よりと思つていゝのだろうか。それともその両方とも本当なのだろうか。」と結んでいた。

# 故郷の人



志<sup>し</sup>村<sup>むら</sup>有<sup>くに</sup>弘<sup>ひろ</sup>  
(相模女子大学名誉教授)

私の祖先は、宮城県の白石に住んでいたが、江戸時代が終わると、没落した。私の家の場合、別に榮えていたわけではないのだから、あるいは「没落」という表現はふさわしくないかも知れない。ともあれ、私の祖父は北海道に渡った。

ところで、札幌の豊平川畔に「札幌開祖志村鉄一碑」があり、豊平橋を渡り、川を挟んで斜め向かいに「札幌開祖吉田茂八碑」が建っている。『北海道の歴史散歩』（山川出版社）に「幕末に豊平川の渡し守をしていた志村鉄一・吉田茂八らが札幌最初の住民といわれ、豊平橋のたもとは、札幌開祖志村鉄一の碑がたっている」と記され

ている。

以前、私は、「志村」の姓である「鉄一」さんに敬意を表し、この碑を拜みに行ったことがある。志村鉄一碑には、鉄一が「信州の剣客」で「石狩調役荒井金助の招き」で安政四年（一八五七）に移住し、幕命を受けて豊平川の渡し守と駅通を兼ねた由が記されていた。吉田は志村よりも早く安政二年に亀谷丑太郎に従って南部より北海道に入ったという。二人は渡し守仲間として話し相手であったというが、少年時代からチャンバラ遊びが好きであった私は、鉄一が信州の剣客であることに興味を覚えた。

私は、北海道の深川というところで

生まれた。高校を卒業して上京したのだが、いつしか北海道・東北出身のクラスメートと親しくなっていた。山形鶴岡の湯田川出身の大井三敏は、故郷の自慢話ばかりしていた。工業高校の出身であったけれど、小説家になるのが夢で、いつも大学ノートに小説を書いていて。大井の兄の中学時代のクラス担任が、小菅留治（藤沢周平）であった。藤沢は時代小説に奇妙な名の秘剣を書き込んでいたが、大井は兄から聞いたとして、藤沢は剣道はせず、全て剣の本を読んで、そこから考え出した秘剣名であったと教えてくれた。大井とは昔も今も親しくつきあっている。歳月が流れると、たとえクラス

メイトであったとしても、相手の名前を呼び捨てにしにくいものがある。しかし、大井とは、今も互いに名前を呼び捨てにするつきあいをしている。

私は作家の福田清人の家には、比較的親しく出入りしていた。福田は（もう晩年であったが）、福田の教え子で、近代歌人の研究をしていた小野勝美を「あの人は器用な人でね、歌人研究だけでなく、釣りの本なども出しているね」と褒めたたえていた。小野と私は、互いに二十代のとき、交流があり、私の所に訪ねてきてくれたこともあった。

最近、ある名簿に、小野勝美の名が記されているのを見た。晩年の福田の言葉を思い出し、電話を掛けてみた。小野も私のことを憶えていたが、電話のあと、北海道吟行集とでもいうべき歌集『大地の風韻』を送ってくれた。北海道には、よく出かけて行くのだという。歌集を見ると、北海道生まれの私も行ったことのない場所にも出かけている。今、ミステリー小説を書いて

いるのだと話していた。名簿の著述の箇所には『涙痕―原阿佐緒の生涯』の他に『利尻の海の赤い花』という作品名が記されている。あるいは『利尻の海の赤い花』は、小野が言っていたミステリー小説なのであるうか。驚いたことに、小野はわが先祖と同じく、白石生まれであった。小野は電話の向こうで「前世から決まっているのか、人は会うべき人と会うものなのですね」と話していた。

昔、私は、小野孝二や花村奨と一緒に横浜で開かれた長谷川伸展を見に行ったことがあった。小野や花村らと同じく長谷川伸の会に所属していた右近稜という人も共に来ていた。横浜から帰る電車の中で、隣に座った右近に「お生まれは……？」と訊くと、「北海道の深川」と応えた。驚いた。似たようなことが他にもあった。福田清人家の新年会で、横に座った人が、私に生地を訪ねるので、「北海道の深川です」と言うと、その人は驚きながら、以前、私が出た高校で教員をしていたこ

とを話した。その人は、私が高校に入ると入れ違いに故郷の東北に帰り、やがて作家となるべく上京したのだという。その人は、第一回吉川英治賞を受賞した須知徳平であった。

最近、司書房（古本屋）主の中野照司や、アニメ書房（古書店）を営む春田道博（同人雑誌「ベガータ」主宰者）と親しく言葉を交わしている。中野は深川に近い沼田の出身で、春田は北海道追分の出身。しばしば電話で文学や故郷のことを話す麻生直子は、北海道の奥尻島出身で、奥尻島が津波に襲われたとき、鎮魂・応援詩「憶えていてください」を書いたのは有名だ。私は麻生が主宰する詩誌「潮流詩派」所属の清水博司とも親しくなったが、清水は北見の出身。清水は最近出した詩集『さあ帰ろう』をはじめ、『いきつもどりつ』など四冊の詩集を出している。やはり、出会うべき人とは出会えるようになっていくのかも知れない。

（文中、敬称略）